

い の ばる
井 ノ 原 遺 跡

—県営畑地帯総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書(3)—

2018. 3

宮崎県西諸県郡
高原町教育委員会

序 文

高原町内では、国営の西諸農業水利事業、及びそれに関連する県営畑地帯総合整備事業が実施されており、平成 28 年度からは県営畑地帯総合整備事業に係るほ場整備事業が施工されています。

平成 31 年度施工予定の後川内 1 期地区において、井ノ原遺跡が消滅等の影響を受けるため、宮崎県西諸県農林振興局の依頼を受けて、平成 29 年度、高原町教育委員会で井ノ原遺跡第 1 地点の第 1 ～ 3 区の発掘調査を行いました。本書はその発掘調査の概要報告です。

調査により、縄文時代早期の遺物・土器が検出されたほか、縄文時代後期、平安時代の土器も少量ではありましたが、出土しています。第 1 ～ 3 区で出土した土器は、縄文早期の平椀式と呼ばれる土器が大半でした。石製品は石鏃、石匙や線刻のある垂飾品などが出土しています。石製の垂飾品は九州内でも出土例のない資料だそうです。これらは、今後、高原町をはじめ宮崎県等の歴史・文化を考えるうえで貴重な歴史資料であると考えております。

本調査報告書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、また、本書が埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査実施にあたってご協力・ご指導いただきました宮崎県西諸県農林振興局、宮崎県文化財課、地元及び関係諸機関の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

高原町教育委員会

教育長 江 田 正 和

例 言

- 1 本書は、宮崎県西諸県農林振興局から依頼を受けて、平成 29 年度に高原町教育委員会が実施した県営畑地帯総合整備事業後川内地区に所在する井ノ原遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2 当遺跡は、宮崎県西諸県郡高原町大字後川内字井ノ原 3374 番地 1 他に所在する。
- 3 発掘調査は、高原町教育委員会主任主事玉谷鮎美、埋蔵文化財調査員面高哲郎を調査担当者として、平成 29 年 7 月 19 日から平成 30 年 3 月 30 日までの間実施した。
- 4 遺構等の実測は、面高のほか、竹中美智子、福田稔、田中幸吉、丸山修平等が行った。一部については（有）ジパング・サーベイに委託した。
- 5 本書で用いたレベルは海拔絶対高である。方位は、業者（有）ジパング・サーベイに委託した図面については真北である。
- 8 掲載遺物の番号は通し番号であり、本文・写真の番号は一致する。
- 9 本書で使用了遺跡発掘作業中の写真及び遺物の写真は、面高が撮影した。
- 10 下記の業務について業者に委託した。
基準点・グリッド杭の設置・地形測量・遺構実測・・・・・・・（有）ジパング・サーベイ
空中写真撮影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（株）九州航空
自然科学分析（植物珪酸体分析、樹種同定、年代測定）・・・・・・・（株）古環境研究所
- 11 発掘調査及び概要報告書作成にあたっては、下記の機関、方々に適切なご指導・ご助言をいただいた。
赤崎 広志 大坪 志子 菅付 和樹 高橋 信武 堂込 秀人 永友 加奈子 西嶋 剛広
日高 優子 水之江 和同 吉本 正典 （有）黒木建設
- 12 本書の執筆・編集は、面高が行った。
- 13 出土遺物及び実測図・写真等は、高原町教育委員会で保管している。

凡 例

- 1 遺構の略号は下記のとおりである。
竪穴遺構、竪穴状遺構：S A 土坑：S C 溝・溝状遺構：S E 配石炉：S R
その他遺構(ピット列)：S Y

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	2
第2章 調査の概要	3
第1節 第1地点の調査区設定	3
第2節 層序	4
第3節 調査の概要	4
1 第V層の調査	4
2 第X～XI層の調査	5
(1) 1・2区の調査	5
(2) 3区の調査	7
3 第X～XI層の出土遺物	8
第3章 まとめ	12

挿図目次

第1図 井ノ原遺跡の位置図	1
第2図 井ノ原遺跡の地形図・調査区	3
第3図 グリッド配置図	3

写真目次

1 井ノ原遺跡の近景	2	19 1区北半の遺物出土状況	8
2 第3区西壁土層	4	20 出土土器(押型文)	8
3 1区V層での遺物出土状況	4	21 出土土器(口縁部)	8
4 SC1の検出状況	5	22 出土土器(口縁部)	8
5 SE1の検出状況	5	23 出土土器(口縁部)	8
6 1区造成土及びIX層出土遺物	5	24 出土土器(「T」字状口縁部)	9
7 表採及びIX層出土遺物	5	25 出土土器(口縁部)	9
8 1区・2区の調査状況	5	26 出土土器(頸部)	9
9 SR1の検出状況	6	27 出土土器(頸部)	9
10 SR1底面の配石	6	28 出土土器(胴部)	10
11 SI1～4の検出状況	6	29 出土土器(胴部)	10
12 SI1土器出土状況	6	30 出土土器(頸部、胴部)	10
13 ピット列の検出状況	6	31 出土土器(胴部)	10
14 3区北半遺物出土状況	7	32 出土土器(塞ノ神A式、頸部)	10
15 SC2の検出状況	7	33 出土土器(塞ノ神B式)	10
16 SC2の埋土	7	34 出土石器(石鏃、石匙)	11
17 SC3の検出状況	7	35 出土石器	11
18 SC3の埋土等	7	36 出土垂飾品	11

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

井ノ原遺跡は、昨年度発掘調査を実施した川路山遺跡の東約400mに所在し、標高196mの丘状地形に立地している。

井ノ原遺跡は、平成9年度に実施した遺跡詳細分布調査で遺跡の所在が判明し、採集土器片から古墳時代の時期としていた^{註1}。井ノ原遺跡の所在地が県営畑地帯総合整備事業に係るほ場整備計画地内であったため、平成28年4、11、12月に実施した宮崎県文化財課の確認調査により平栴式土器、黒川式土器が出土したので、縄文時代早期及び晩期の時期の遺跡でもあることが確認された^{註2}。



第1図 井ノ原遺跡の位置図

① 井ノ原遺跡 ②川路山遺跡 ③川除遺跡 ④立切地下式横穴墓群

宮崎県西諸県農林振興局では、平成28年度から県営畑地帯総合整備事業に係るほ場整備及び水路埋設等を施工している。井ノ原遺跡周辺のほ場整備は、平成31年度に施工予定であり、畑地拡大のため、遺跡北東の谷部を埋める計画である。それに伴い、遺跡が所在する丘は、削平され、遺跡が消滅する予定となっている。そのため、西諸県農林振興局からの依頼により、高原町教育委員会が発掘調査を実施することになった。発掘調査対象面積は約13,000㎡であったので、2か年事業として、29年度は丘状地形(第1地点)の西傾斜地約5,000㎡の発掘調査を実施し、30年度は丘状地形の最高位及び南傾斜地(第2地点)を調査することになっている。

註1 高原町教育委員会 「高原町遺跡詳細分布調査報告書」高原町文化財調査報告書第3集 1998

註2 宮崎県教育委員会 『高原町・県営畑地帯総合整備事業 後川内地区井ノ原遺跡』平成28年度県内遺跡発掘調査報告書 2017

第2節 調査組織

井ノ原遺跡の発掘調査組織は、下記のとおりである。

調査主体 高原町教育委員会

教育長 江田 正和

教育総務課 課長 田上 則昭

社会教育係 係長 中原 圭一郎

調査担当者 社会教育係主任主事 玉谷 鮎美

社会教育係発掘調査員 面高 哲郎

社会教育係調査補助員 竹中 美智子

発掘作業員 池崎 良夫 内村 絹代 岡崎 順子 岡元 義一 奥 喜代司 上村 勝男

上村 恭子 川畑 英春 久徳 利雄 窪田 貴代子 久保田 光信 小村 俊男

正入木 政喜 関田 克己 瀬戸口 長経 竹内 愛子 田中 幸吉 鶴田 孝徳

寺師 時信 橋口 廣海 原田 賢雄 花牟禮 照雄 松本 タケ子 丸山 修平

村山 保夫 安岡 健二 山崎 啓子 柳 桂子 湯舟 玲子

整理等作業員 福田 稔 城山 宗一郎



写真1 井ノ原遺跡の近景(西方向から)

第2章 調査の概要

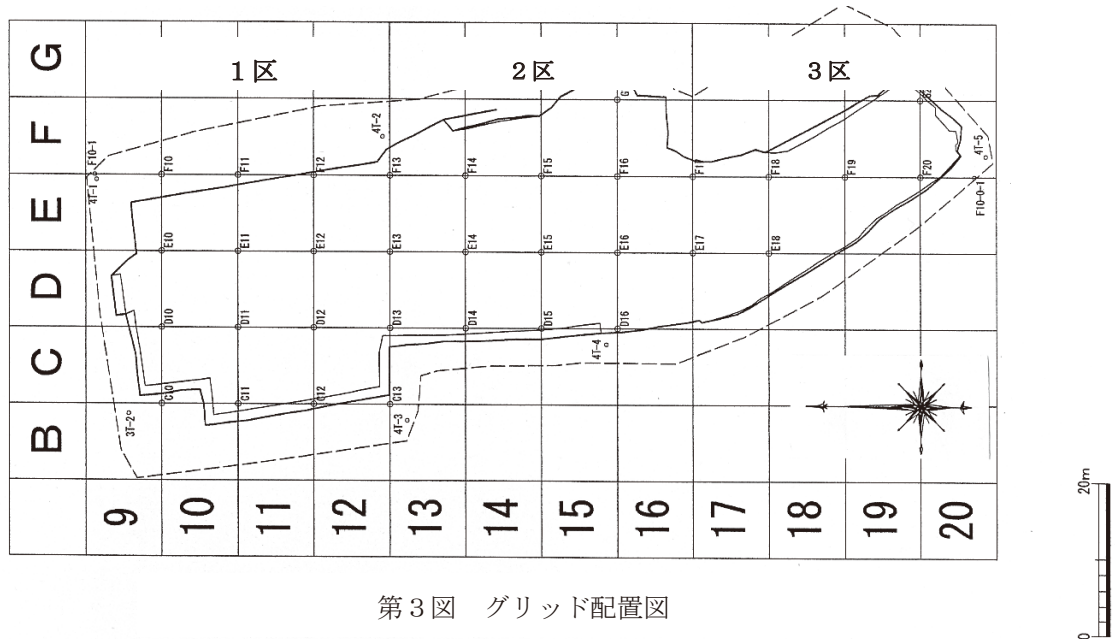
第1節 第1地点の調査区設定

本年度の調査対象とした箇所は、西斜面の3枚の畑で、便宜上、北から1～3区と呼称している。3枚の畑はいずれも畑地造成工事によりほぼ平坦化されて、段々畑状となっている。南端の3区を高位にして、北に向かって1mほどの段差をもって低くなっている。

なお、来年度調査予定の4区は井ノ原遺跡内で最高位であり、本年度調査地との比高差は2～3mほどである。



第2図 井ノ原遺跡地形図・調査区



第3図 グリッド配置図

第2節 層序

井ノ原遺跡の層序は以下のように大別できる。第Ⅰ層：表土（耕作土）、第Ⅱ層：造成土、第Ⅲ層：旧表土で黒褐色の高原スコリアを含む。第Ⅳ層：黒色土、第Ⅴ層：サラサラした橙色土（通称二次アカホヤ）、第Ⅵ層：牛のすね火山灰とアカホヤの混土、第Ⅶ層：アカホヤ、第Ⅷ層：牛のすね火山灰である。第Ⅴ層は1区のみが存在し、3区では存在していない。第Ⅸ層は黒色土（埋没表層）、第Ⅹ層：スコリア混じりの黒褐色土、第Ⅺ層：黒褐色斑混じりの暗褐色土である。1区では第Ⅴ層で縄文時代後期の市来式、平安時代等の遺物が出土し、3区のり面の第Ⅳ層で土師器坏のへら切りの底部が出土している。第Ⅹ層～Ⅺ層では縄文時代早期の平楕式土器などが出土している。

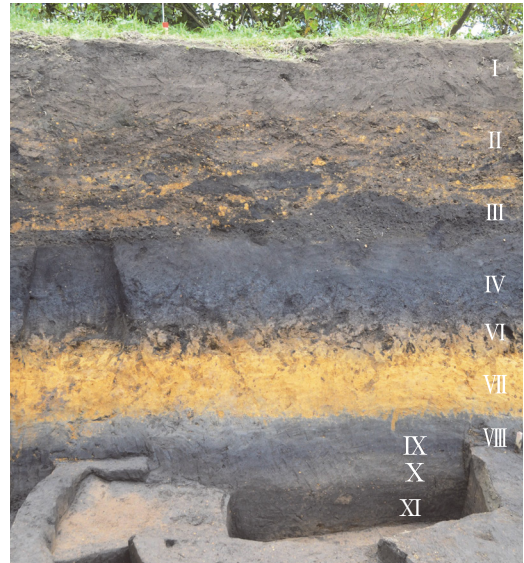


写真2 第3区西壁土層

第3節 調査の概要

調査は、1区と3区を併行して行なう。排土置場については2区とした。1区の表土剥ぎの際、一般に縄文前期以降の遺物を包含する第Ⅴ層（二次アカホヤ）が残存していたので、この層の調査を行った。3区では第Ⅴ層が残存していなかったため、一気に縄文早期の包含層（第Ⅸ層）辺りまで表土を除去し調査を行った。1区では第Ⅴ層の調査を終了したのち、第Ⅴ層～第Ⅸ層を除去し、縄文早期包含層（第Ⅸ層）を露出させた。その間に3区の調査を終了し、2区の排土等を3区に移動した後、1区と2区の縄文早期包含層の調査を同時に進めた。

1 第Ⅴ層の調査

Ⅴ層は1区西半の傾斜地のみに存在する。表土除去中に土器片が出土したので、予定になかったⅤ層の調査を行うことになった。

遺構は、土坑1基、溝状遺構1条が検出される。土坑（SC1）は、約径1mの範囲で焼けた骨の小片、炭化物が多く出土した。溝状遺構（SE1）は全長3.2mが確認され、2箇所赤褐色の変色土、焼土が認められる。いずれも遺構内からは土器が出土せず、現在のところ、いずれも時期は不明である。



写真3 1区Ⅴ層での遺物出土状況（南より）

Ⅴ層から出土した遺物は、縄文後期及び平安の遺物が同一層から出土している。3は市木式の口縁部である。2はチャート製の石鏃で縄文後期のものと考えられる。4は表土剥ぎ中にⅤ層（二次アカホヤ）上面で採集した。この遺物の採集により当初調査対象外であったⅤ層が遺物包含層であることが確認された遺物である。色調、胎土、器面調整等から弥生後期から古墳前期頃の甕形土器の胴部である可能性がある。5・6は土師器坏片で、5は口縁部、6は胴部である。



写真4 SC1の検出状況(南より)

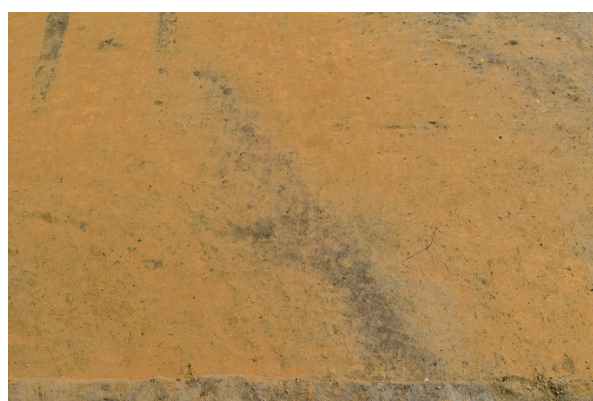


写真5 SE1の検出状況(西より)



写真6 1区造成土及びIX層出土遺物



写真7 表採及びIX層出土遺物

この他、第1区の西のり面の第Ⅱ層造成土層で縄文後期の市木式土器(1)、3区のり面の第Ⅳ層黒色土で土師器坏のへう切りの底部(7)が出土している。また、排土から古代の壺の胴部と推定される須恵器片(8)が採集されている。

2 第X～XI層の調査

(1) 1・2区の調査

1区第X層～XI層の調査は、1区のV層除去、2区に仮置きしていた排土を3区に移動した後、2区の調査と同時に行う。

地形測量は、縄文早期頃の地形を推定するため、第X層面で行い、等高線は25 cm間隔で作成した。第X層面の地形は、1区では北及び西方向に、2区では西方向に傾斜している。現在1区で検出されている遺構



写真8 1区・2区の調査状況(北西より)

は、配石炉(SR)1基、集石遺構(SI)5基、竪穴遺構(SA)1基である。そのほか、炭化物の集中する箇所が1か所あり、これは、炭化物を伴う土坑と推定している。

SR1は、16個の礫が円形状に集石している遺構である。径20 cmほどで極めて小規模であるが、検出時においても遺構の上部や周囲に礫は存在していなかったもので、これが本来の規模で

あったと考えている。上部の石 4 個の下部には 12 個の礫で花卉状に配石されていた。



写真9 SR1の検出状況



写真10 SR1底面の配石



写真11 SI1～4の検出状況



写真12 SI1土器出土状況(南より)

SI1～4はE10区の東端で、1m×0.8m程の方形状の中に4か所の集石状態で検出された。4基の集石はいずれも20数cmの範囲に集石している。4基の間はゴボウ作付け用のトレンチャーで縦横に深掘りされているため、集石遺構が切断されている可能性があり、1基ないし2基が存在すると思われる。集石の状態から浅いながらも土坑を伴っていると思われる。

SI1では渦巻状の沈線がある口縁部(23)が出土している。この口縁部は「T」字状をなしている。

C11・12区の傾斜地西端で鈍角の三角形に並ぶピット列(SY)が検出された。ピットの径は10～12cm、深さは10cmほどである。70～80cmの間隔でほぼ一列に並んでいる。頂点は最高位にあり、間口は8mほどである。堅穴は現在確認されていない。ピット列周辺で出土した遺物が、この遺構に伴うかについては不明である。



写真13 ピット(赤のマーカー)列の検出状況(西より)

(2) 3区の調査

3区においては南端に黒色土が残存している。表土剥ぎの際に遺物等が確認されなかったので、第Ⅸ層：牛のすね火山灰まで一気に除去し、縄文早期の包含層Ⅹ層(黒褐色土)上面を露出させた。3区は南、西方向に傾斜している。表土等を除去した状況を見ると、畑造成にあたっては、高所の東より西及び南方向に土の移動が行われていることが確認され、東側の一部では小林軽石(16,700年前)が露出している。



写真 14 3区北半遺物出土状況(東より)

3区で検出された遺構は、土坑3基である。SC2はD18区調査区西端で、黄橙色の砂粒状の粒子が径1mの円形状に密集していたことから、その存在を確認した。写真16のとおり、埋土はレンズ状に堆積している。最下層の埋土は、暗褐色土で粘質である。遺物は出土していない。

なお、SC4の検出は、SC2と同様、埋土に黄橙色の砂粒状粒子が確認されたためである。



写真 15 SC2の検出状況



写真 16 SC2の埋土



写真 17 SC3の検出状況(爪楊枝は炭化物)



写真 18 SC3の埋土等

SC3は、褐色土面において、炭化物を多く含む円形状の黒色部分があり、F18区東端付近でその存在が確認された。土坑はすり鉢状の形態で、埋土は黒土である。埋土内にも炭化物が多く含まれている。遺物は炭化物以外出土していない。

(3) 第X・XI層の出土遺物

SA1、SI2、SY1などで遺構に伴って遺物が若干出土しているが、遺物の大半は第X・XI層出土である。出土した土器は、押型文、天道ケ尾式、平栴式、塞ノ神A式、塞ノ神B式等である。

石器は、石鏃2点、磨石、石匙2点、磨滅痕のある礫・礫片、赤化した砂岩礫、石製の垂飾品(A地点)などが出土している。

9～11は楕円押型文土器であるが、いずれも文様形態は乱れている。12は外反する口縁部で、口唇部に刻目、頸部には列点文間に横沈線文が施文されている。13は幅広の肥厚帯をもつ波状の口縁部である。口唇部に刻み、肥厚帯の上下には刻目突帯がある。口唇直下の上の突帯は、波頂部より左側が二条の刻目突帯になっている。肥厚帯の刻目突帯間には列点文、沈線文が渦巻風に施文されている。14は口唇部に刻目が施文され、その下位には横方向の刻目突帯がある。



写真19 1区北半の遺物出土状況



写真20 出土土器(押型文)



写真21 出土土器(口縁部)

15は外反する口縁部と推定されるもので、口唇部に「ハ」の字状を呈する刻目が横方向に施文されている。直下の貼付突帯は棒状のもので押圧されている。突帯の下には太めの撚糸？を縦方向に押圧している。16は断面三角形の突帯をもつ口縁部である。口唇部には横方向に「ハ」の字状を呈する刻目が、その下位には列点文間に2条の沈線文が横に施文されている。17は断面三角形の貼付突帯の口縁部で、口唇部に刻目、突帯上面に波状の沈線文が施文されている。突帯



写真22 出土土器(口縁部)



写真23 出土土器(口縁部)

下の口縁部には無文帯を介して沈線が横に施文されている。18 も断面三角形状の貼付突帯をもつ口縁部で、突帯上面に沈線が口唇部まで施文されている。突帯下位には斜め方向の列点文、沈線文及び横方向の列点文、沈線文が施文されている。19、20 は断面台形状の貼付突帯をもつ口縁部である。19 は口唇部及び突帯先端に刻目が施文されている。その間の突帯上面には方向の異なる沈線が施文されているので、「ハ」の字状を呈している。突帯下位には無文帯を介して列点文が施文されている。20 は口唇部及び突帯先端に刻目が施文されているが、突帯上面は無文である。突帯下位では、刻目突帯を境に上部では波状の沈線文、下部には斜方向の沈線文が施文されている。21 は断面半楕円状の突帯をもつ口縁部で、突帯下端に段はなく、突帯下位には無文帯を介して列点文が施文されている。

22 は「T」字状の口縁部で斜方向の列点文、沈線文が施文されている。23 も「T」字状の口縁部である。口唇部及び下端に刻目が施されている。23 は 23mほど離れて出土した口縁部と接合している。接合資料を見ると波状口縁であることがわかる。刻目間の列点文、渦巻文等で埋められている。24、25 は大きく外反すると推定される口縁部で、幅広の肥厚帯をもつ。肥厚帯上には列点文、沈線文が施文されている。



写真 24 出土土器(「T」字状口縁部)



写真 25 出土土器(口縁部)

26、27 は深鉢の頸部～肩部で、口縁部は緩やかに外反していると推定される。文様は列点文や沈線文が直線状に、或いは曲線状に施文されている。28、29 は肩部～頸部で傾き具合から壺と推定される。28 の肩部内面は成形時の凹凸が未調整のままとなっており、外面の文様は列点、沈線により渦巻状に施文されている。29 の内面はケズリ調整で、口縁部分ではケズリ調整後ナデ調整され、肩部分ではケズリ調整のみである。外面の文様は縦方向の沈線文、押し引き風の列点文が施文されている。



写真 26 出土土器(頸部)



写真 27 出土土器(頸部)

30～35 は胴部である。30～32 は結節縄文が施文された胴部である。33 は斜方向に縄文、34、35 は縄文が羽状に施文されている。36 は底部で胴部は縄文が羽状に施文されている。



写真 28 出土土器(胴部)



写真 29 出土土器(胴部)

37 は頸部～肩部である。肩部に縦方向の刻目突帯があり、列点文、沈線文が施文されている。肩部には炭化物が多量に付着している。38 も胴部で刻目突帯、列点文、沈線文が施文されている。横方向の突帯には突帯を挟むように刺突されている。39 も胴部で刻目突帯、列点文、沈線文が施文されている。列点文、沈線文は「V」字状を呈している。40 は肩部で列点文、沈線文が3単位で横方向の施文されている。41 は胴部で縦方向の刻目突帯を挟み、縦方向の列点文、三角形状に沈線文、列点文が施文されている。42 は中央に刺突がある瘤状の突帯があり、沈線文、列点文が施文されている土器である。



写真 30 出土土器(肩部、胴部)



写真 31 出土土器(肩部、胴部)



写真 32 出土土器(塞ノ神A式、頸部)



写真 33 出土土器(塞ノ神B式)

43 は横沈線文の下位に、縦方向の網目撚文が施文されている。塞ノ神A式と思われる。44 は口

縁部が大きく開く頸部である。頸部内面に稜線はない。文様は2単位の刻目突帯が口縁部、肩部に施文されている。

45～47 は塞ノ神式B式と思われる土器である。45 は口縁部で貝殻押引文が施文されている。46 は胴部片で貝殻押引文が施文されている。47 も胴部片で貝殻条痕文が施文されている。

48、49 はいわゆる鋏形の石鏃である。出土したのはこの2点のみである。48 は黒曜石製、49 はチャート製である。50、51 は石匙である。50 は黒曜石製で側辺及び下辺に刃部が形成されている。51 は身の部分が台形状で下辺に刃部が形成されている。頁岩製である。

52 は砂岩製の剥片で、左側辺は潰れて丸くなっている。右下半に長軸5 cm、短軸3 cmほどの半楕円状に摩滅痕が認められ、手ずれ痕と思われる。53、54 は下半部に摩滅痕が認められる石器である。この摩滅痕は表裏ともほぼ同じ幅である、53 は砂岩製、54 は頁岩製である。55 は先端が丸く仕上げられた現長5.5 cm、幅3.5 cm、厚さ0.7 cmほどの石製品である。側辺は剥離により形を作り、研磨して形を整えている。



写真 34 出土石器(石鏃、石匙)



写真 35 出土石器

56 は石製の垂飾品である。D11 グリッド杭近くの出土している。出土層は早期包含層X層である。出土地が風倒木の部分ではあったが、層に乱れはなかった。現長12.1 cm、幅2.4 cm～1.9 cmである。両面ともよく研磨されている。表面の中央に縦の線刻、さらに3単位を基本とする「X」字状の線刻、また、両側辺には刻目が施文されている。上端中央に穿孔された孔がある。この部分は欠損しているので、本来、全長は13 cmほどあったと推定される。石材は頁岩である。



写真 36 出土垂飾品

第2章 まとめ

本年度調査した第1～3区の旧地形は、西面する斜面で、調査区東縁部はアカホヤ直下ないし小林軽石層あたりまで畑造成の際に削平されている。さらに調査東半部は、ゴボウ作付けの際のトレンチャーによる深耕により攪乱を受けている。特に1区は縦横に深耕されている。この攪乱土からは土器や赤化した礫が出土しているが、その量は多くはない。

本年度の調査で、出土した或いは表採された遺物、遺物は、平安の土師器坏、須恵器の壺片、縄文後期の市木式、縄文早期の押型文、天道ケ尾式、平椀式、塞ノ神式A・B式などである。

平安及び縄文後期の遺物は、1区のみが存在した通称二次アカホヤと呼ばれる第V層で出土している。大きく時期の異なる遺物が包含されていることは驚きであった。通常、第V層の上には3区のように黒色土(IV層)が存在しているものである。1区の傾斜地には黒色土が堆積せず、V層が常に地表面であったとも考えられる。今後、検討していきたい。

井ノ原遺跡1～3区では、縄文早期の遺物は押型文、天道ケ尾式、平椀式、塞ノ神A・B式土器が出土、採集されている。早期の土器は1000点ほど出土しているが、確認された押型文は報告した3点のみである。また、塞ノ神式は出土したB式3点、表採された塞ノ神A式1点、B式1点で塞ノ神式は5点のみである。出土土器の95%以上は平椀式土器であり、高橋編年の平椀I～III式土器に相当する。出土土器の比率から遺跡の主体は平椀式土器の時期と推定している。

遺構としてはC12・13区の西端で、ピットが16個確認され、15個が三角形に並ぶピット列の状態で検出されている。ピットの径は10cm、深さも10cmほどである。間口が8mあり、建物の柱穴にしては間口が広すぎるので、今のところピット列の性格等は不明である。

石製品の垂飾品は、D11グリッド杭近くの風倒木部分の層に乱れない第X層で出土している。垂飾品は、頁岩を丁寧に両面研磨・整形し、表面に線刻、側面に刻みをいれている精巧なものである。上端に穿孔があることから垂飾品であろうが、ただ、下端に敲打痕風の潰れは気になるところである。垂飾品の時期は、縄文早期の包含層第X層から出土している。同層からは95%以上が平椀式土器であるので、垂飾品はこの時期の遺物である可能性が高い。縄文早期において井ノ原遺跡出土の垂飾品と類似する石製の垂飾品は、現在のところ九州内では出土例は無いようである。

昨年度調査した井ノ原遺跡の西400mに所在する川路山遺跡は、塞ノ神式A式土器が主体の遺跡である。川路山遺跡では、石鏃の出土量も多く、チャート、黒曜石等のチップが多数出土しているが、井ノ原遺跡の1～3区では石鏃は表採を含めて3点であり、また、チップの出土は極めて少ない。井ノ原遺跡と川路山遺跡での石鏃、チップの出土量が異なっているのは、遺跡の性格の差を表しているものと思われる。

なお、町教委の分布調査では、井ノ原遺跡は古墳時代の遺物散布地として報告している。分布調査の際に表採された土器片は、写真7の4の土器に類似した土器であったと思われる。

報告書抄録

ふりがな	いのぼるいせき							
書名	井ノ原遺跡							
副書名	県営畑地帯総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（3）							
シリーズ名	高原町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編集者名	面高 哲郎							
発行機関	高原町教育委員会							
所在地	〒889-4492 宮崎県西諸県郡高原町大字西麓 899 番地							
発行年月日	平成 30 年（2018） 3 月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
いのぼる 井ノ原遺跡	たかはろちよう 高原町 おおあざうしろかわち 大字 後川内 あざいのぼる 字 井ノ原	450413	N11	31.930	131.077	H29、7、19 ～ H30、3、30	約 5,000 ㎡	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
井ノ原遺跡	散布地	縄文早期	竪穴遺構 配石炉 集石遺構 土坑 ピット列	土器：押型文土器、 天道ケ尾式土器 平桁式土器 塞ノ神式B式土器 石器：石鏃、石匙、磨石 石製の垂飾品			出土土器の 95%以上 は平桁式土器である。 出土した石製の垂飾品 に類似する垂飾品の出 土例は九州ではない。	
要 約	○ 今年度の調査地は、西面する傾斜地で、調査地の東縁は畑地造成により包含層は消滅している。 ○ 1 区は、2・3 区に比べ傾斜がやや緩やかである。特に 1 区の D10 グリッドは平坦気味であり、この箇所に遺物が集中し、竪穴遺構も検出されている。 ○ 出土した土器の時期は縄文早期、縄文後期、弥生～古墳、平安であるが、土器出土量から主体は縄文早期の時期である。特に平桁式土器が出土量の 95%以上を占めているので、井ノ原遺跡の主体は平桁式土器の時期と考えられる。 ○ ピット列は三角形状に並び、間口は 8m ほどある。ピット列の性格等は、現在のところ不明である。 ○ D11 グリッド杭近くの風倒木部で出土した石製の垂飾品は、出土層から縄文早期の遺物である。出土した土器の 95%以上は平桁式土器であるので、垂飾品は平桁式の時期である可能性が高い。現在のところ、九州内で井ノ原遺跡出土と類似した垂飾品の出土例はない。							

高原町文化財調査報告書第 17 集

井 ノ 原 遺 跡

県営畑地帯総合整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)

2018 年 3 月

編集・発行 高原町教育委員会

〒889-4492 宮崎県西諸県郡高原町大字西麓 899 番地

TEL 0984-42-1484 FAX 0984-42-3939

印刷 (株) 長崎印刷

〒889-4413 宮崎県西諸県郡高原町大字後川内 18-2 番地